

(別紙様式2 ②)

議 員 報 告 書		
1 議 員 名	児玉史則	
2 期 日	2025年11月12日～2025年11月13日	
3 研 修 先 等	11月12日 徳島県勝浦郡上勝町 11月13日 徳島県海部郡海陽町	
4 内 容 (目的)	徳島県上勝町に於ける「葉っぱビジネス」の持続に向けた現状の課題と解決策の実践事例を研修すること。またゴミ処理のリサイクル・リユースのこれまでの取組内容、現状の課題と新たな先進事例や現地施設を視察し今後の安芸高田市のごみ処理施設の在り方の参考とする。また阿佐海岸鉄道については、過疎地に於ける利用客減少に伴う鉄道の存続に対して、道路と線路の両方を走行できる車両を導入し、鉄道の一部を廃止している。芸備線でも鉄道の維持に向けた議論を行っているが、その参考事例として、現在の利便性や採算性、今後の存続に向けたあり方の研修を行い今後に向けた参考事例を研修する。	
5 報 告 事 項		
1. 徳島県上勝町		
説明者	上勝町長	花本 靖氏
	上勝町企画環境課主事	栗林 七波氏
	(株) いろどり代表取締役社長	粟飯原 啓吾氏
	地域おこし協力隊員	田中 翔氏

① 葉っぱビジネス

1986年にスタートした農業ビジネスで高齢化や人口減少という地域課題への挑戦。料理の「つまもの」用の葉を特産品として販売し事業化させた。高齢者の就労機会と生きがいを目的としておりICT機器の利活用を通し需要情報と個人個人の売上金額が見える化し、競い合うことでやりがいにつながっている。2023年には年商2億6,000万円、130軒もの農家が参加している。課題は後継者不足であり、2020年より後継者育成事業に取り組み、葉っぱ事業をやりたい人を全国から募集しベテラン農家に派遣し栽培技術を学んでもらいながら農家の労働力にもなっている。

② ゼロ・ウェイスト宣言の街

ごみを生み出さないようにすることで暮らしを豊かにする取組。2003年に日本初の「ゼロ・ウェイスト（ゴミゼロ）」を宣言し、現在13種類45分別に取組んでいる。2020年にはリサイクル率80%を達成。野焼きや埋め立てが健康被害・環境破壊・資源損失・財政圧迫につながることを町民が共通の課題として過去から共有しており意識が高い。ゴミステーションや町民が不要になったものを持ち帰るショップ等運営。現在の課題は紙おむつのリサイクルで企業「花王」と連携し炭素化リサイクルシステムの実証実験を行っている。

③ 阿佐海岸鉄道「DMV」

説明者 (株)阿佐海岸鉄道 代表取締役 大谷 尚義氏
利用者の減少により鉄道の一部線路の廃止区間を、道路と線路の両方を走行できる車両として「DMV」を導入している。新たな地域公共交通としての取組だが、高額な車両や「DMV」を既存線路へ引き込むための新たな設備、道路運行・線路運行に伴う運転資格の人材確保の難しさ、急勾配や積雪地域での運用面の課題等多々あり、特に日常の生活交通として利用は伸び悩んでいる。珍しさから観光客増には一定の効果がある。

6. 所感

「葉っぱビジネス」は生産農家、JA との連携の中で「いろどり」が第三者的サポートを行っている。何処も同じだが生産者の減少があり、現在後継者育成事業に取り組んでいるが、この繋ぎ役の役割が重要であり「いろどり」の活動は参考にする必要性を痛感した。また「ゼロ・ウェイスト」への取組は、当市でも「きれいセンター」の建替えの課題があるが、その前にゴミを出さないといった考えが必要と認識した。当市の現状の分別は、償却を前提とした分類となっているように思う。リサイクル・リユースの考え方を広く市民に訴え理解してもらうことが最初の一步でそのための努力の必要性を学んだ。

「阿佐海岸鉄道 DMV」は芸備線の存続に向けた対応の一つで、鉄道の廃線部分の維持管理費が削減するメリットはあるが、初期投資としての車両価格や、維持費、道路運行から鉄道線路への入線のための設備投資など高額費用が発生する。1992 年に開業し当初は世界初ということもあり集客効果はあったが経営的にはこれまで 32 年間赤字で、今後の展開を見ていく必要がある。現時点では導入には否定的で沿線住民の移動手段、観光振興、公共交通ネットワークの必要性を改めて認識する機会となった。